

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

概要書

カポエイラのエスノグラフィー

-リオデジャネイロにおいて創造される文化的固有性-

The ethnography of Capoeira

: The cultural originality created in Rio de Janeiro

2014年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

細谷 洋子

HOSOTANI, Yoko

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授

ブラジルの民族スポーツであるカポエイラは、奴隷であったアフリカ系黒人がおこなった護身の練習やアフリカ由来の N'golo というゼブラダンスが起源とされている。そして、格闘性、芸能性、舞踊性を併せ持つカポエイラは、アフロブラジル文化の一つとされ、多人種・多民族国家としてのブラジルで興ったナショナルイズムの文脈において、1930年代から現在までに二度に渡りナショナルアイデンティティの表象として位置づけられた。

本研究は、現代ブラジルのナショナルイズムの枠組みにおいて政策によって付帯されたカポエイラの社会的役割を明らかにし、リオデジャネイロにおけるカポエイラの現況に基づき、創造される文化的固有性を実証的に明らかにすることを目的とした。そのために、2003年以降の学校教育におけるカポエイラの導入、競技化、ゲーム形式の創造、観光化という異なる文脈におけるカポエイラの変容を捉えた。

第1章では、ブラジルにおけるナショナルアイデンティティの再創造を踏まえ、政策の検討から現代におけるカポエイラの社会的役割が明らかにされた。ブラジルのイデオロギーの転換に伴い、カポエイラは1930年代には人種混雑による同質化を意味する「混血」のナショナルアイデンティティの象徴とされた。他方では、1980年代から現在にかけて「多人種」という個々の差異を照射し、エスニシティの一つの「アフロブラジル」の象徴とされるという対照的な位置づけがなされた。また、公的政策において、2003年に学校教育基本法の改正法令10639号によって基礎教育段階（初等教育と中等教育）でアフリカ並びにアフロブラジル文化歴史教育が義務化された。現在は、各地方自治体や各教育機関によってカポエイラの教材化が進められている。そして、2008年には文化省下部組織のブラジル歴史芸術研究所（IPHAN）によってカポエイラがブラジル無形文化遺産として登録された。現在、ブラジル政府は多文化主義国家として大衆教育を通じて「アフロブラジル」というエスニシティを共有し、新たなナショナルアイデンティティの創造に着手している。これらのことより、アフロブラジル文化としてのカポエイラはナショナルアイデンティティ形成へ一役を担うという社会的役割が付帯されたといえる。

第2章では、学校教育という制度にカポエイラが布置されることによって、新たに見出されるカポエイラの教育的価値が考察された。国レベルでは教育省による『2004年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針』と『2009年アフリカとアフロブラジル文化歴史教育と民族人種関係教育の国家カリキュラム方針実施国家計画』において、アフロブラジル文化歴史教育の最終的な目的は豊かなブラジル国家の発展のためにブラジル社会の根深い人種主義を撲滅することであると示された。また地方自治体レベルでは、調査対象地であるリオデジャネイロ州リオデジャネイロ市教育局による

『2010年リオデジャネイロ市幼児教育カリキュラム指針』において、カポエイラが教育内容の一つとして明記されていた。

また、事例の参与観察に基づき、幼児の発育発達を踏まえた教材としての再構成が必要とされる幼児教育段階では技の完成度よりも行為としての意味に目が向けられることが看取された。そして、ゲーム成立の基軸となる「問いかけと返答」という行為の意味を重視することは、他の教育段階にも敷衍されうる教育内容の重要な観点であると考察された。

第3章では、カポエイラの競技化としてアバダ・カポエイラにおける1997年から2013年の競技大会に着目した。競技規則の前文で「カポエイラの特徴を最大に維持するための競技の実現」を目指すことが明記され「文化的アイデンティティ」を理解することが競技者心得として掲げられた。そして「支配権力の及ばない領域」でカポエイラの基底をなすカポエイラ独特の世界観を明文化することによって、その世界観が「カポエイラ芸術」の固有性として実践者に意識され、保存されていることが明らかになった。

第4章では、アバダ・カポエイラにおける新たなゲーム形式「アマゾナス」の創造について、その理念と経緯、創作過程、動きの詳細が検討された。創造されたゲーム形式は、動物の模倣を通して、動物らしさの「表出」表現を伴う新たな形式として捉えられ、カポエイラ独自の表現領域の創造と模索が確認された。

第5章では、世界的な観光地のリオデジャネイロ市とアフロブラジル文化発祥地のサルバドル市の劇場におけるショーとしてのカポエイラを元に動きと作品構成を検証し、ショーの象徴するアイデンティティの位相について考察した。ショーの演技内容の検証によると、ショーのカポエイラの動きは高速化し、超絶技巧が作品構成の中心を成しており、エンタテインメント化していた。また、各劇場におけるショーのカポエイラがそれぞれ異なる位相でアイデンティティを表現していた。前者は「ブラジル」という国の多文化・多様性の一つとして「アフロブラジル」のエスニシティを表現しており、後者は「バイア」という地域を前面に出し、地域を境界にした「バイア」というエスニシティが表現され、実践者の強い帰属意識が表されていた。

以上のことから、制度では「アフロブラジル」のエスニシティの象徴としてナショナルアイデンティティ形成に寄与する社会的役割がカポエイラに付帯された。その一方で、リオデジャネイロにおけるカポエイラの教材化、競技化、ゲーム形式の創造、観光化の諸文脈において実践者によって文化的固有性が創造される現況が明らかになった。

このような実践者レベルにおける固有性の創造は、カポエイラという文化としての固有性の模索の表れともいえ、カポエイラそれ自身が発展するという文脈の中で新たな価値を創造しながら柔軟に適応していく生の姿として捉えられた。